高見順全集

夢

高見順全集

第二卷

高見順全集　第二卷

昭和四十六年四月二十五日發行
昭和四十九年二月二十日發行（二回）

著者　高見順
發行者　井村壽二
印刷者　山田博
發行所　勁草書房
東京都文京區後樂二―二三―一五
電話東京八一四（六八六一）
振替東京一七五二五三
©高見順　一九七四
〇三九三―八三三二〇―一八三六

＊本書の定價は外函に表示してあります。

高見順全集　第二卷

編纂委員
川端康成
伊藤整
澁川驍
平野謙
中村眞一郎
小田切進

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

更生記　7
ある晴れた日に　75
東橋新誌　173
銀座近情　349
まだ沈まずや定遠は　473
解説　久保田正文　503
解題　514

更生記

――この物語は友人K・N君より作者に送られた長文の手記に基いて書かれる。

作者はこの物語に於いて描かれるK・N君の實際の姿を、夙に知つてゐた。その周圍、――即ち物語に登場してくる他の人人も、作者は知つてゐる。作者はかねてK・N君をモデルにして一篇の物語を作りたい希望を抱いてゐた。そこへ、はしなくもK・N君から手記が送られて來た。それは一種の感動なしには讀むことの出來ぬものであつた。異常な衝撃を與へる異常な事件が述べられてゐる譯ではない。そこに書かれた話は、話としては極く平凡な、世によくある話に過ぎないのである。作者は手記で讀む前に既に、彼から斷片的に聞いて知つてゐた話である。その話に作者が興味を覺え、彼をモデルにして書かうと思つたことは前に述べたが、さうした興味と、手記を讀んで受けた感動とは別種のものであつた。同一の話から、何故、作者は單なる小說的興味と深い感動と、――異つたものを受け取つたのであらうか。言ひかへれば、既に知つてゐる話にも拘らず、再び彼の手記によつて讀んだ時、全く新しい感動を與へられたのは何故か?

作者の知つてゐたのは「話」であつた。どうしてかうしてといふ物語の筋であつた。K・N君はその物語の演じ手である。演じ手といふ意味で、作者はK・N君に興味を覺えたのだが、興味の焦點は「話」にあつた。

ところが、手記のなかでは、K・N君といふ人間を通して「話」が語られてゐる。K・N君は世にいふ左翼崩れの一種のタイプで、生きるといふこと、生活といふことを輕蔑して、そこに何の希望も情熱も持たない男であつた。それが……。

いや、此處で物語の前に、不手際な梗概的なことを述べるのは控へねばならぬ。

――作者がこれから書かうとする物語は、重ねて言ふが、K・N君の手記に基いたものである。即ち、彼の手記の持つてゐる前述のごとき特徴を生かしつつ書きたいと思ふのである。或は、手記をそのまま此處に紹介した方が、それを作者が下手に物語化するよりも、讀者に訴へる力に於いて勝つてゐるのではないかとも作者は考へる。

だが、手記はK・N君がその生活に對する考へ方に於いて「更生」の第一歩を踏み出さうとするところから始まつてゐる。それ故、いかなる狀態から「更生」したか、その以前の彼の姿に就いては述べられてゐない。以前の彼を知つてゐる作者にとつては、書かれなくとも、それは豫め作者の頭に收められてゐた。そして書かれてない以前の彼を知つてゐることは、手記を讀む、いはば豫備智識として缺くことの出來ないものである。即ち、手記をそのまま紹介する場合は、作者は以前の彼を豫め紹介しなくてはならない。そこで矢張り全體を物語化して書かうと意を決した。

物語は、以前の彼に戻つて、はじめられる。
主人公のK・N君を作者は假に籾山と名付ける。

一

籾山は神奈川縣の工場の運輸部へ行つて、東京の本社に丁度歸つたところであつた。

彼の机は事務室を入つたすぐ扉の脇にあつた。その机につづいて工場の細長い作業机のやうなのが、窓のない壁にくつついて並んでゐた。郵便物の、社へ來たのや社から出すのや、——それから工場や各部へ行く書類などが皆んなここへ集つてきて、この机の上で整理されるのである。アラビヤ糊の乾いたのが光つてゐるその細長い机のさきに、何か不細工な恰好の邦文タイプライターがあつて、額が飛び出た、そして低い鼻のさきに汗の粒を浮べたタイピストに、給仕の一人が何か話しかけながら、ガチャンガチャンとホッチキスを叩いてゐた。タイプライターの音とホッチキスの音がぶざまに入り混つて、——うるさいが、然し事務室へ戻つたといふ感じの一番さきにくる、なつかしいやうな又氣持の重くなるやうな音であつた。

「お歸んなさい」

髪を櫛目正しく撫でつけ、顔も綺麗にあたつて化粧水を塗つてゐる、おしやれ好きの給仕が籾山に挨拶して、赤くなつた掌を揉み「——あ、痛い。痛えなア」と言つた。

籾山はいつもながらムッツリした顔で、上衣をぬいで、椅子の背に掛けた。櫛を通したことのないやうな頭である。顎にはまばらな不精鬚が生えてゐた。

「ねえ、籾山さん。このホッチキスといふ奴は便利なやうで、——不便なものですね」

M大學の夜學に通つてゐて、その制服を着た給仕が、「ムカデ」と普通言はれてゐる紙を綴る金具の針金を拾つて、しなはせながら、さう話しかけてくるのに、籾山は面倒臭さうに首だけ振つて見せた。

「手が痛くなつて、堪らしねえや」

籾山は意味のない笑ひを向け、眼は机の上に亂雜に積み重ねられた書類に、ぼんやりと向けてゐた。

知らない人だつたら、疲れてゐるのだなと見るであらう籾山の態度だ。だが、彼はいつも、かうだつた。いつも、心をどこかに預けてきてゐるやうな、意志的なものをどこかに置き忘れたやうな彼だつた。といつて、仕事に對しては決して怠慢な譯でなかつた。投げやりに見えてちやんと處置してゐた。テキパキとやるといふ感じこそ無いが、緩慢なコンベヤーのやうに忠實に機械的に、自分の上に乘つかつてくる仕事を運んでゐた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

——そこへ、もう一人の年の下の給仕が扉を押して入つてきた。
「お歸んなさい」
「うん」
籾山は交換臺から廻して來た電報の控へを手にしてゐた。
「——籾山さん」
「うん」
夜間中學へ通つてゐる給仕が、坊主頭を寄せてきて、
「難波さんのところへ面會人なんですがねえ」
「難波さん？　難波さんなら難波さんに言へよ。——ほう、ナツ（返信料前納電報）が多いな」
「難波さん居ないんですよ」
「ぢや斷ればいいぢやないか。——手があいたら算盤入れるから賴むよ」
「ところがねえ、籾山さん。駄目なんですよ」赤ん坊の時、寢せられてばかりゐたせゐだと自分で言つてゐるが、らつきより頭のうしろが斷崖絕壁のやうに成つてゐる。そこを平手でピシャピシャと叩き乍ら、何か甘えるやうな調子で言つた。
「——席に見えませんがと言つたら、居留守を使つてるのだらうと、その人は言ふんですよ。ウソぢや無いと言つても信用しなくて駄目なんですよ」
髮を光らせたもう一人の給仕が、好奇の顏を寄せてきた。これは何かといふと、ずるけようとばかりしてゐて、自然、年の下の給仕がらつきより頭を振り立てて、まるで栗鼠のやうに忙しく驅け廻つてゐた。でもこの少年は別に不腹も言はず、默々とまめに働いてゐた。
「借金取りかなんかだらう。放つて置くさ」
籾山は煙草をくはへた。
「——女の人なんですよ。借金取りぢや無いらしいな。前にも來たことがある……」
「女の人は見掛けなかつたが」
社に戻つて來た時、入口の受附に中年の男が一人ゐただけだつた。
「受附を通さないで、廊下の向うにゐて、僕が通りかかるのを待つてたんですよ」
籾山は別に興味を惹かれぬ顏で、机に眼を落した。
「ねえ。籾山さん。僕ぢや信用しないから、ちよつと行つてやつて下さいよ」
「俺行かうか」もう一人の給仕が言つた。
「君ぢや駄目だよ。——ねえ、籾山さん」
「チェッ。女といふと、いやに親切だ。子供の癖して、しやうがない奴だな」年上の給仕は毒々しく言つて「ムカデ」で相手の頭を叩いた。少年は怒つたやうな悄氣たやうな表情で
「さうぢやないんだよ。——何か、氣の毒なんだよ」

「よし行つてやらう」籾山は椅子を離れた。
——事務所は、汽船會社のビルディングの三階の一部を借りてゐた。それで、外からの出入の自由な、街路と同じ廊下であつた。
給仕と一緒に廊下に出たが、それらしい女の姿は見えなかつた。「あつちにゐるんでせう」と言つて給仕が先きにたつて行くのについて、廊下を廻つたが、矢張り見えない。「おかしいな」給仕が濟まなさうにして、頭を搔いた。もうひとつ廊下を廻つた。
「ゐた。ゐた」
背のすらりとした洋裝の女がエレベーターの前に立つてゐた。こつちに背を見せ、片方の靴の先きで何かいらだたしさうに床をコツコツと叩きながら、指示器を見上げてエレベーターのボタンを押してゐた。
「歸るんか」給仕が腹立たしさうに呟いた。「さつきは、難波さんに會ふ迄はどうしても歸らないといつた風だつたのに……」
「——いいさ」
歸るのを强ひて捉へて難波の不在がうそでないといふのを仰々しく告げることもあるまいと籾山は給仕の腕を抑へた。そのまま踵を返すつもりで、だが、ちよつとの間、スポーティな白麻のスーツを着た女の後姿に眼をやつてゐた。すると、女はボタンから手を離すと、片方の手のさきに無雜作に、でも自墮落な感じでなくぶらさげた綠色の皮革のハンドバッグを何んとなく前後に振つてゐたが、軈てスカートを輕くはたくやうにして大きく前に振り上げると、くるりと身體をかへした。
細面の美しい顏だつた。どこか寞れの見える感じだが、眼には、いきいきとした、といふより幾分熱つぽい、感情的な、何か挑戰的な强い光りが輝いてゐた。怒つた野獸の眼に似た荒々しさがあつた。だが、顏全體の印象は理智的な冴えた冷たさであつた。——籾山と給仕の姿を見ると、瞬間、彼女は微笑とはいへない不思議な表情をその美しい顏に浮べた。冷笑の氣味を混へて、微かに白い齒をのぞかせた脣が、花のやうに鮮やかだつた。
「籾山さん。賴みます。——ぢや、僕」
と給仕は女の表情に狼狽して、そそくさと去つて行つた。
二人は離れたまま、向ひあつて立つてゐた。こつちから歩み寄つて行くのが何か業腹な氣持で、籾山はぢッとその場に立つてゐた。女もエレベーターの前に立ちつくして、——それは籾山をどこかで見たことがある人だがと記憶を探つてゐる感じの佇立で、今は險しい眼の色も消してしげしげと籾山の顏を眺めてゐたが、そのうち、それと氣付いたらしく「あら！」と驚く顏を見せた。そこへエレベーターが降りて來た。

女は開かれたケージのなかに、「すみません」と手を振つて見せて、つと籾山の方へ驅け寄つて來た。

「——籾山さんでしたわね」

「はあ」

籾山の方は女の顏に見覺えがなかつた。俺にこんな美しい女の知り合ひがあつたかしらと身體を固くして、思ひ出さうとあせつたが、手がかりさへ摑めない。さうした自分に腹立たしさを覺え、相手の美しさに瞠目し心を惹かれただけに、忘れたといふことを知らせるのが何か遺憾だつたから、

「——しばらくでした」

と思はず言つて了つた。その內、分るだらうとしたのである。うその故に、聲は親しみを缺いた固いものだつた。

「籾山さんは、あの會社にいらしたのね。ちつとも知らなかつた」

あの會社、——難波のゐる會社といふ意味だ。籾山は難波と結び付けて考へられる顏見知りの女といふのを、あれこれと心の中でせはしく追ひ求めながら、

「難波さんと同じ部で、——難波さんの下で働いてゐるんです」

と、相手の正體の見當がつかないままに、あとで慌てることがあつてはと鄭重に言つた。それが又妙にそらぞらしい響きになつた。「——難波さんを訪ねていらしたさうですが、生憎く留守で……」

さう言ふと、女の表情が變つて、忽ち險しい眼に成つて、

「難波さんに賴まれて、代りに會つて下さるといふ譯ですのね」

「賴まれて?」

籾山が言つた。女は何も言はず、自分の言葉の效果を探るやうな眼であつた。

「僕は別に賴まれはしません。賴まれようにも、難波さんは留守なんですから……。僕は、さつき一緒にゐた給仕に賴まれて、出てきたんです。難波さんは留守だと言つても、あなたは信用なさらないさうで、そいで僕に出てくれといふので……」

「——では」

と女が遮つた。「難波さんがお見えに成つたら、かうお傳へ下さいませんか」

前と違つた固い調子で言つて、ちよつと間を置いて、言葉を考へる顏を示したのち、

「私、なにもかも知つてますの。別に何も申しませんから、どうぞ御自由にッて、さう仰有つて下さいません」

言葉とともに波立つてくる感情を、ぐつと抑へ隱した聲の奧に、ただならぬものが感ぜられる。籾山は徒らに眼を瞬いてゐた。

「もうお眼にかかりませんからッて、――さう仰有つて下さい」

情事にちがひないことは籾山にピンと來た。飛んだことに成つたものだと、不用意な自分の出しやばりの豫期せぬ結果に驚き、うろたへると同時に、眼の前の美しい女性を難波とさうした關係で結びつけて見ねばならぬことが、彼に激しい苦痛を與へた。

「僕は……」と彼は逃げを張つた。だが女は籾山の口を封ずるやうな眼をきッと注ぐと、そのまま颯と背を見せ、折から丁度扉を開いたエレベーターに向つて走つた。左肩をあげ、首をその方に傾げて……。

その恰好は、見覺えがあつた。籾山は爪を齒に當てた。

――さうだ那木君の妹だ！

氣付いた時は、エレベーターの扉がしまつてゐた。

二

――難波は、ほんたうはY商業しか出てないのに、Y高商出身みたいなことを言つてゐると、社内で蔭口を叩かれてゐた。庶務課長をやつてゐて、專務の氣に入りであつた。專務に巧みに取り入つて、まだ若く學歴もなく、そんな柄でないのに課長の椅子を獲得したのだと、社員たちは言つて、妬みからだらうが、難波を餘りよく言ふものはなかつた。誰も正確な齡を知らない。聞いても、難波は笑つて答へなかつた。いつも身綺麗にしてゐて、顏も艶々としてゐたから、とても若く見える時があつたが、時とすると、案外四十に近いのではないかと思へる時もあつた。獨身だつた。だが、それは表向きで、ただ一緒にゐないといふだけで、内緣關係のがあつて、それを隱してゐるのだといふうはさもあつた。今時のサラリーマンには珍しい大それた出世の野望を抱いてゐて、その手蔓に成るやうな結婚をひそかにねらつてゐて、そんな口があつたら、内緣のと別れる爲に表面獨身を裝つてゐるのだといふのである。どうも餘り穿ち過ぎた噂のやうだが、難波には、そんなあくどい噂が何か事實のやうに思へる翳があつた。とはいへ、難波は人の眼に暗い祕密を感じさせるやうな、暗い感じの男ではなかつた。彼は努めて明るく朗らかに振舞つてゐた。輕薄と思へるほど、いつも人に對しては愛想のいい笑顏を浮べてゐた。下のものにも、必要以上に腰が低かつた。だが、さうしたことが何故か、ほんたうに善良な性格からくる透明なものと違つた、奥にひそむ濁りを感じさせるところがあつた。油斷のならない狡智と、陰險なたくらみを感じさせ、そこに翳があつた。

籾山は不思議な人物と見てゐた。皆が蔭で難波を餘り惡く言ふと、籾山は却つて彼を庇ひたくなるやうな奇妙な氣持に

驅られた。天邪鬼の感情からではなく、難波の仕事振りに見られる逞しい意志的なものに、籾山はかねて心を惹かれ、若干尊敬に近い氣持を寄せてゐたからである。尊敬といふより、自分に無いものに眼を張り、珍しく思ふ氣持といふのに近いかもしれない。皆が寄つてたかつて難波を非難するのを聞くと、かねて心を惹かれてゐた難波の逞しさが籾山の眼に鮮やかに映つてくるのであつた。——だが、それを口に出すことはしなかつた。難波の下で働いてゐるので、そのため課長を庇ふといふ工合に皆に思はれるのが嫌だつたからだといふ譯ではない。言葉に出して庇ひたくなるほどの、そんな強い氣持でもなかつたからだ。それはつまり、難波の逞しさに時に尊敬に近い氣持を寄せることもあつたが、時には輕蔑を感ずることもあつたからだ。會社の仕事を一所懸命にやつてゐる難波が哀れに見えるのである。逞しいといへば逞しいが、仕事に全心を傾けてゐるといつた恰好の難波が、何か卑小な下らない人間に見えた。愛想のいい笑顔、腰の低さ、明るさ、——それも性格からくる自然の感じでなく、ビジネスの爲の擬態と見える時は、さうした難波が輕蔑すべき人間に思へた。さうした人間に憎惡すら感ずることもあつた。他の社員のやうな妬みからくる憎惡とちがつてゐたから、籾山の憎惡はもつと深い一種生理的なものと言へた。——籾山はかうして難波に對して相反するふたつの感情を持つてゐた。そこから籾山には、難波が不思議な人物に見えたのである。

——那木の妹が置いて行つた言葉を、初めは難波に傳へまいと思つた。聞かなかつたことにして、知らん顔をしてゐよう。他人に知られては困るにちがひない個人的な問題に立ち入るのはいやだ。大體そんなことを、傳へてくれと頼んだりするのが非常識だ。籾山はさう考へてゐたが、そのうち徐々に、違つた氣持が頭を擡げて來た。立ち入つては惡いとおもふだけに意地惡くそのなかに踏み込んで行きたい荒々しい氣持が、難波を憎む氣持と結びついてゐた。それが自分ではどうにもならない勢ひで、强く成つて行つた。那木の妹が現在どこにゐるのか、どうしてゐるのか、それを難波から聞き出したい氣持もあつた。

退社時間近くなつて、難波が外から歸つてきた。事務室のなかで言ふのは流石に控へ、部屋の外へ立つて行くのを待つてゐた。待つうちに機會が來た。

「——難波さん」

廊下を大股に行くのを、後から呼び掛けた。難波は肉附の豐かな頸に精力的なくびれを見せて、振りかへつた。

「さきほど那木さんが見えました」

言ひながら、籾山は側へ寄つた。

「那木さん?」とぼけた風に言つて、籾山の表情を觀察したのち、

「――ああ、那木さん」と、事もなげに言つた。
「生憎く難波さんはお出掛けで」
脂の光つた淺黑い顏を難波は小刻みに振つてゐたが、
「で、僕が代つて出ましたが……」
籾山がさう言ふと、難波はキッと顎を引いた。
「僕の親友の妹でして」
「親友の？　ああさうですか」
愛想笑ひを浮べて口では輕くさう言つたが、眼は光つてゐた。
「――親友だつた男の妹なんです。その男は數年前、氣の毒に死にましたが」
那木秀一といひ、籾山とY大學の同級生で、學生時分、一時は親友の交りを結んでゐたが、間もなく那木が思想運動に身を投じてからは以前のやうな交りでなくなつた。當時籾山は思想的には左傾してゐたが、那木のやうに實行運動に飛び込む決心がつかず、那木に熱心に說かれても、シンパ以上に出ることが出來なかつた。そして那木の手を通して定期的に金錢を提供したり、下宿の部屋を祕密の會合に貸したりしてゐた。その關係で那木と時々會つてはゐたが、何か溝が出來、もとのやうな親しさは失はれた。
那木と親しくしてゐた時分、二三度、籾山はその家を訪れ、妹の登喜子に會つた。今とちがつて頰のふくらんだ、ぽちやぽちやとした顏には、粉を吹いたやうな生毛がはえてゐて、男の視線に會ふと、その顏を譯もなく眞赤にして了ふ女學生だつた。籾山の前に茶を置くと、一刻も早く逃れたいといつた風に例の左肩をあげて首を傾げる恰好で驅け去るのであつた。そんな極く平凡な、――電車のなかなどでザラに見受けられ、別に眼を惹かれることもない女學生といつた風な彼女が、現在のやうな、美しい颯爽とした女にならうとは、思ひも寄らぬことだつた。――那木は運動に入ると、家を出たので、それからは籾山は登喜子に會はなかつた。
那木は聽て檢擧されて刑務所に入ると、かねてから蝕れてゐた胸が忽ちひどく成つて、出獄した。海岸に保養に行つてゐると籾山は友人から聞いて、一度見舞ひに行き度いと思ひながらそのままに成つてゐるうち、遂に死んだといふ報せを受け取つた。それから數年に成る。
「――實は那木さんから、あなたに傳へてほしいと賴まれたことがあるんです」
籾山はズボンからくしやくしやの汚いハンカチを出して、神經質に掌の間に丸めてゐた。
「ほう、なんですか」平然たる顏で、ワイシャツを捲り上げた毛深い腕をピシャピシャと叩いた。
「那木さんの兄貴と僕とは親友だつたもんですから、それで、那木さんも言つたんでせうが……」いざと成ると流石にひる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com